茶道が私に教えてくれた、グローバルな和の精神

近畿大学附属高等学校　２年　須田　悠加

私は茶道を高校の部活動で始めた。幼稚園の頃の茶道体験で食べた栗転がしが忘れられなくて、「茶道部に入れば、またあの味を堪能できるのではないか」という何とも幼稚な理由がきっかけだった。しかし、今となっては、私にとっての茶道は「日本と世界を繋ぐ架け橋の一つ」と捉えるほどになっている。それは、私が経験したカナダ留学が契機である。

私はカナダの語学学校に通い、英語の上達に励んでいた。学校では、クラスメイトと互いの母国の文化について話す機会が多く、その際に私が「高校で茶道を学んでいる」と話せば、みな目を輝かせた。特に「茶道っていつからあるの？」「茶道はただお茶を飲むだけなの？」といった質問が多く、驚きと興味の入り混じった表情で私の説明を聞いてくれた。茶道を日本の伝統文化として、ある程度、身近なものだと感じていた私にとって、外国人のクラスメイトがそれほどまでに興味深げな表情を浮かべ、たくさんの質問を投げかけてくることが、はじめはとても不思議に思えた。彼らからの質問に少々戸惑いながらもできるだけわかりやすく答えると、私の返答すべてに驚いて感動していた。その様子を見て、私にはある一つの考えが浮かんだ。それは「茶道は外国人にはあまり知られておらず、彼らにとって茶道はまだまだ未知なものである」というものだ。この考えは少しマイナスな印象が強く聞こえるかもしれないが、私はこれが「日本と世界を繋ぐ架け橋」の一つとなりえるポテンシャルが非常に高いと感じた。なぜなら、グローバル化が進み、世界との関係性が重要視される現代社会において、茶道の魅力を伝えることで今以上に日本文化に興味を持つ外国人が増えるのではないだろうか。他国の文化に触れることは、必ず、貴重な経験になる。そうして、世界との交友関係が広がっていく。この上ないほど素晴らしいことではないだろうか。

私は、留学生活で様々な人と関わった。その関わりの中で、茶道を通して学んだ「和」の礼儀や思いやりの心が交友関係を築く上でとても役に立った。言語の壁や年齢の壁など無数の壁が立ちはだかる中でのコミュニケーションは、大変困難で神経が疲れてしまう。私は何度もそのような壁にぶつかり、どうすればよいのだろうとたくさん悩み、いろいろなことを試したが、どれもそれほど効果はなかった。そこで一度、考えをリセットして自然体で過ごしてみた。すると、今までの苦労が嘘のように相手と打ち解けられた。私はなぜなのかと考えて、茶道を通して触れた「和」の心のおかげだと気づいた。茶道で培った他人への思いやりや協力し合い助け合う心が、相手との距離を縮めるきっかけになっただけでなく、私自身も幸せにしてくれたのだと。そしてそれは、茶道を楽しんで学んでいる中で自然とできたことだった。「茶道」という伝統文化を学べて本当によかったと心から思った。このような経験も茶道を学ぶ意義なのだと私は考える。

私の茶道を始めた理由はとても滑稽なものだ。しかし、こんな私でも茶道から多くのことを学び、感じ、成長することができた。それほど茶道は奥深くて無限大の可能性のある日本が誇る伝統文化であり、私は本当に感謝している。私はこれからも「和」の心を忘れずに、「日本と世界を繋ぐ架け橋」である茶道を学び続けて次世代へと伝えていきたいと強く思っている。